



NEWSLETTER

CENTER FOR SOUTHEAST ASIAN STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

(2006年12月1日～2007年5月1日) No.56

2 稲森財団が「稲森財団記念館」を京都大学に寄附

—北棟と南棟跡に来夏竣工予定

Construction of a new building named
“Inamorizaidan Kinenkan” has started

3 21世紀 COE プログラム終わる

21st Century COE Program has been completed

4 シンポジウム

「地域研究と情報学—新たな地平を拓く」開催

Symposium on Area Studies and Informatics:
Discovering New Horizons in Area Studies

5 拠点大学交流事業ワークショップ

JSPS Core University Workshops in Bangkok and Kyoto

6 〈栄誉〉 Award Winner

白石隆客員教授が紫綬褒章を受章

Visiting Prof. Shiraishi

〈栄誉〉 Award Winner

藤田幸一教授に第一回櫻山純三賞

Prof. Fujita

7 〈栄誉〉 Award Winner

State and Society in the Philippines
by Drs. Abinales and Amoroso
has been selected as a **Choice**
Outstanding Academic Title for 2006

8 地域研究コンソーシアム年次集会

Annual General Meeting of
Japan Consortium of Area Studies

国際ワークショップ

「東南アジアにおける科学技術コミュニティ形成」

International Workshop “International Collaboration
for Formation and Development of Science and
Technology Community in Southeast Asia”

9 国際ワークショップ

「東南アジア研究をめぐる東アジアネットワーク構築」

International Workshop “Building East Asian
Networks on Southeast Asian Studies”

国際ワークショップ

「インドネシア華人研究」

International Workshop “Indonesian Chinese
Studies at the Crossroads? Challenges and Prospects”

10 京都大学附置研究所・センターシンポジウム

「京都からの提言」開催

Symposium “Proposal from Kyoto”

ワーキングペーパーシリーズ始まる

Introducing Kyoto Working Papers on Area Studies

11 出版ニュース

Publication News

12 人事

Personnel Changes and New Visiting
Research Fellows

13 〈東風南信〉 Reflections

『中国農業史』 古川久雄

*Needham's Science & Civilisation in China:
Agriculture* Furukawa Hisao

14 Visitors' Views

16 Colloquia

17 2007年度科研費プロジェクト・リスト

List of new CSEAS Projects with the financial
support of Grant-in-Aid for Scientific Research

18 〈海外疾病だより〉

Getting Sick Here and There

〈連絡事務所だより〉

Letters from Liaison Offices

20 研究会報告

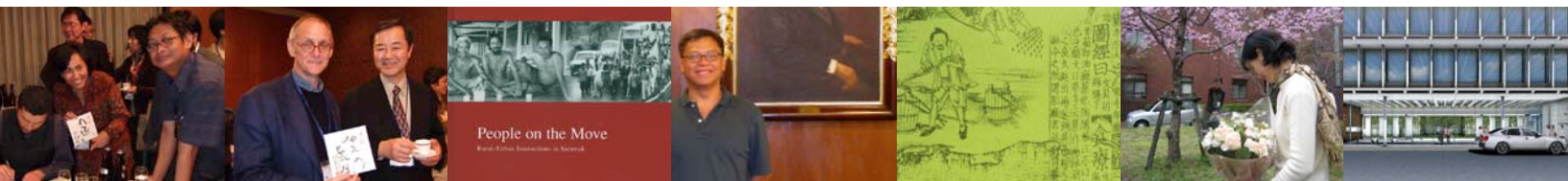
Report on Seminars

22 図書室ニュース

Newly-arrived books at the Library

来訪者

Visitors





(図は全て(財)稲盛財団ホームページから転載)

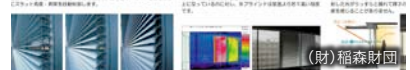
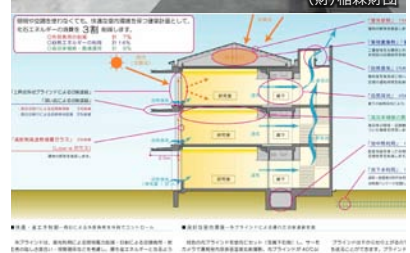
稲盛財団が 「稲盛財団記念館」を 京都大学に寄附 北棟と南棟の跡地に来夏竣工予定

京都大学（尾池和夫総長）と財団法人稲盛財団（稲盛和夫理事長）は、稲盛財団が「稲盛財団記念館」を建設し京都大学に寄附することについて合意し、2007年2月14日に覚書の調印式を行った。この概要は翌日の新聞各紙に発表された。この記念館は、教育研究や国際交流及び地域交流を推進する中核拠点として、社会に広く開かれた大学の象徴となることが期待されている。現在東南アジア研究所の一部である北棟と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の一部である南棟が取り壊され、その跡地に稲盛財団記念館が建設される。建物は、鉄筋コンクリート造・地上3階で、床面積は約6,000平方メートルとなる予定で、2007年7月頃着工開始、2008年夏完成を目指している。1階には、京都賞に関する情報を内外に広く紹介するための「京都賞ライブラリー（仮称）」および京都大学のフィールドワークの歴史や現状をデジタルデータにより一般に公開するための「京都大学デジタル・アーカイブ（仮称）」が設置され、その他のスペースには、東南ア

ジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、地域研究統合情報センター、およびこころの未来研究センター（仮称）の研究室及び会議室等が配置される予定である。

稲盛財団は、稲盛和夫氏（現京セラ株式会社名誉会長）により、1984年に設立された財団で、科学や文明の発展、また人類の精神的深化・高揚に向けての創造的な活動に対する顕彰、助成および社会啓発活動などを通じて、国際相互理解の増進に努め、人類の平和と繁栄に積極的に貢献していくことを目的としている。先端技術、基礎科学、思想・芸術の各部門で大きな貢献をした人々に贈られる京都賞は、その事業の一つである。稲盛財団記念館は、京都賞や京都大学のフィールドワークの紹介に活用されるのみならず、入居する研究所・研究センターなどの活動を通して、京都大学が我が国を代表する学問の府として、21世紀の更なる学術・文化の発展に貢献していく上で不可欠な場となることが期待されていると言えよう。

(文責：西瀨 光昭)



21世紀COE プログラム終わる

「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成——フィールド・ステーションを活用した臨地教育・研究体制の推進」の21世紀COEプログラムが2007年3月をもって終了した。

21世紀COEプログラムは、2002年度から2006年度までの5年間にわたり、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と東南アジア研究所が共同で運営した、総額5億4千254万8千円の予算が投じられたビック・プロジェクトであった。このプログラムは1998年度～2002年度に実施された旧COE「アジア・アフリカにおける地域編成——原型・受容・転成」の成果実績を引き継ぎ展開するものであった。その目的は、「統一研究テーマ『地球・地域・人間の共生』」「フィールド・ステーション設置・運営」「地域研究統合情報(化)センター設置」「臨地教育・臨地研究の融合」「文理融合的アプローチ」「基礎研究と応用研究の有機的統合」「グローバルな視点と地域間比較研究」といったキーワードで示される。

本部執行会議の傘下に、フィールド・ステーション部門、統合情報化部門、事務局の3部門が設置され、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が中心となって組織運営がなされた。事業推進担当者として28名(内東南アジア研究所からは12名、以下延べ人数)、研究協力者26名(内東南アジア研究所からは9名)、研究科所属のCOE研究員7名(アジアのフィールド・ステーション部門では2名)、事務局と広報部会の職員として6名の総計67名が運営に参加した。

旧COEでは資料収集を中心とする研究資源の整備が行われたが、21世紀COEでは、その研究資源を有効活用、発展させるべく、フィールド・ステーションの設置と運営、「地域研究統合情報化センター」の充実化という研究教育体制の整備が中心課題となった。フィールド・ステーションは機関型(アジアで5カ国6地点、アフリカで4カ国4地点)、機動型(アフリカで2カ国2地点)、学生支援型(アジアの2カ国2地点)に類型され、設置された。5年間で149人・回の院生、院生のオンサイド・エデュケーションを支援するために教員76人・回、若手研究員12人・回が派遣された。いかにフィールド・ステーション事業が精力的に実施されたかが理解される。

院生のフィールド・ワークなどの活動がプロジェクトのエンジンとなり、広報委員会はプロジェクト・ホームページを立ち上げ、充実した広報活動を展開した。院生、若手研究員が中心となる国際シンポジウムやフィールド・ステーションでのワークショップがいくつも開催され、報告書が出版された。東南アジア研究所が深くかかわった東南アジア地域での機関型フィールド・ステーションでは、フィールド・ステーションが設置されたカウンターパート機関の研究者、学生などとの共同研究の積極的推進がはかられた。ミャンマーでは、さらに一步踏み込み、ヤンゴン大学大学院生の博士論文の指導と審査に参加した。ラオスでは卒業論文の積極的出版を支援した。こうしたフィールド・ステーション活動は、



2005年11月29日、ミャンマー・マウビン郡の共同調査村に地域間比較スタディ・ツアーで簡易調査に訪れた、ASAFASの院生たちが村人に話を聞いている。

今後の地域研究の制度的あり方を考える上で大変示唆的である。21世紀COEプログラムは、まさに、若手研究員と院生が活動の主役であり、賞賛に値する成果を残したと自負できる。フィールド・ステーション部門の構成員として運営に参加した一人として、多数の院生や若手研究員の派遣の労をとり、円滑な運営を行った大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の執行部構成員の教員の方々には心から感謝したい。

2006年度後期に実施された外部評価において、フィールド・ステーションの活動は「ポストモダンの批判に答えるもの」(英国サセックス大学 James Fairhead 教授)、フィールドワークを通して得られる「臨地的な『知』が人文・社会科学全体の新たな展開に寄与する」(内堀基光放送大学教授)といった高い肯定的評価を受けた。巨額の予算が投じられたプロジェクトにかかわった一人として確かな成果がみとめられつつあることに、両部局の関係者とともに率直に喜びを分かち合いたい。

本プログラムで育った院生、若手研究員の今後のさらなる成長と、本プログラムの成果である研究教育資源を元手に、両部局が次なる共同プロジェクトを開始し、地域研究における教育と先端的研究を牽引していくことを願い、21世紀COEプログラムの終了報告としたい(なお、本報告の執筆にあたり、全面的に21世紀COEプログラム研究成果報告書(2007年3月)に依拠した)。

(文責：安藤 和雄)

シンポジウム 「地域研究と情報学 ——新たな地平を 拓く」開催

本研究所、日本学術会議・地域研究委員会・地域情報分科会ほか地域研究関係2部局、3プロジェクト、地域研究コンソーシアム2研究会が共催して、2007年2月9、10日の2日間、京都大学百周年時計台記念館においてシンポジウム「地域研究と情報学——新たな地平を拓く」を開催、2日間で116名が参加して熱心な討論が行われた。

本シンポジウムは、地域研究及び情報学の双方の視点から地域研究の新たな展開や展望を議論し、情報学を応用した研究事例を紹介するはじめての取り組みである。

第1日目は、田中耕司地域研究統合情報センター長、岡部篤行日本学術会議会員・地域情報分科会委員長の挨拶につづいて、「データベース『世界と日本』を公開して」と題して田中明彦東京大学東洋文化研所長による基調講演が行われた。セッション1は、グローバル化・情報化の中で地域研究が必要としている情報や情報学に対するニーズを示し、新たな研究展開の可能性について討論することをテーマに、阿部健一氏（地域研究統合情報センター）の問題提起、続いて岩下明裕氏（北海道大学）、黒木英充氏（東京外国語大学）、小杉泰氏（大学院アジア・アフリカ

地域研究研究科）の報告が行われた。セッション2では田中耕司氏をコーディネーターにしてパネルディスカッション「情報学を導入した新たな地域研究の展開」が行われ、桜井由躬雄氏（東京大学）をはじめ6名のパネラーの報告と参加者を含めた討論が行われた。

第2日目は基盤研究(S)「地域情報学の創出——東南アジア地域を中心にして」及び基盤研究(A)「アフロ・アジアの多面的情報資源の共有化を通じた地域研究の新たな展開」の2プロジェクトを中心とする情報学を応用した地域研究や地域情報学の創出を目指す研究事例10件と柴崎亮介東京大学空間情報科学研究センター長、浅見泰司同副センター長による空間情報学の視点からの特別報告が行われた。

2日間にわたる内容は、地域研究と情報学の接点、情報学を導入した新たな地域研究の展開、地域情報学の構築について真正面から議論されたはじめてのシンポジウムとして大変有意義なものであった。シンポジウム終了後、参加者から感想や今後の研究活動に対する意見が多数寄せられ、本シンポジウムに対する関心の高さがうかがえた。

(文責：柴山 守)





「2006年タイ・クーデターからの東アジア社会政治経済への問いかけ」ワークショップ（3月京都）



バンコクワークショップ「東南アジアにおける（イン）フォーマルな暴力機構と民主化」



バンコクワークショップ集合写真



懇親会で、錦市場酒舗社長がゲストの求めに応じてオリジナル・ラベルを作成。このあと錦市場へエクスカーション

拠点大学交流事業 ワークショップ バンコクと京都で開催

2007年2月と3月、拠点大学交流事業に関わる四つのワークショップを以下のように開催した。1) 2月17、18日「東南アジアにおける（イン）フォーマルな暴力機構と民主化」（タイ、チュラロンコーン大学）、2) 3月8日、東アジアの家族の変容をめぐるワークショップ（東南アジア研究所）、3) 3月12、13日、「2006年タイ・クーデターからの東アジア社会政治経済への問いかけ」（京大会館）、4) 3月27日、「タイと日本の地方政治と地方行政」（東南アジア研究所）。

1)、3)、4)のテーマはEntrepreneurshipであった。さまざまな理由から急速に変容を遂げつつある東アジアではあらゆるレベルで秩序が再構築されつつある。こうした秩序再構築の主体をEntrepreneurと呼び、一連のワークショップでは、彼らの思想と行動（Entrepreneurship）、その政治経済的背景などを制度と絡めて分析した。1)のワークショップでは、民主化の進展のなかで、暴力をリソースとするEntrepreneurが成立しうるのかについて検討した。

ミャンマーなどではいまだに圧倒的に国家が暴力を独占しているが、フィリピン、タイやインドネシアでは、とりわけ地方レベルにおいて暴力の拡散、社会化・民間化が進展しつつあり、Violent Entrepreneurshipが成り立ちうること、ただしその継続性については疑問があることが分かった。

3)のワークショップでは、Entrepreneurshipと政治体制との関係を考える上で格好の研究対象であったタイのタクシン政権を比較の視点と社会変容の視点をふまえて検討した。民主化時代の国民国家は、投票という形で国民の支持を取り付ける必要があり、完全に国家を企業的に「経営」することは不可能である。それゆえ、国家の「経営」を目指したタクシン政権もポピュリズム志向を胚胎していた。タイのパスーク教授はこのタクシンの手法を新自由主義型ポピュリズムと名付けた。本ワークショップはこの枠組の妥当性を論じた。明らかになったのは、タイに限らず現在の東アジア地域の国家は、国民国家の二律背反的性格（利

潤（成長）追求と社会サービスの充実）をどのように処理するのかについて転換点にあることである。4)のワークショップでは、タマサート大学学長一行を迎え、タイと日本の地方行政と地方政治を議論した。二つの国家にとって重要な分権化の定着には、制度設計に加えて地方レベルのリーダーシップが不可欠であることが再確認された。

2)のワークショップでは、近代化とグローバル化に伴う「家族」概念と実態の変容について、二人のインドネシア人研究者が調査内容・計画を発表した。政府プログラムの影響もあってジャワの女性が家庭を抜け出て社会政治的に活躍し始めている実態、多元的なインドネシアの法制度のなかでの女性の相続権の変容に関する発表が行われた。

これらのワークショップは昨・本年度に始まった三つの共同研究主催のワークショップであり、2年後の2009年3月にはそれぞれの視点から新しい東アジア像が提示されているはずである。

（文責：岡本 正明）

白石隆客員教授が 紫綬褒章を受章

2007年4月29日、元東南アジア研究所副所長白石隆教授（京都大学名誉教授、現政策研究大学院大学副学長兼ジェトロ・アジア経済研究所所長）が紫綬褒章を授与された。東南アジア地域研究の発展に貢献したことによる。白石教授は、1972年に東京大学教養学部を卒業後、同大学助手、助教授を経て、1987年にはコーネル大学助教授、1996年1月に同教授に就任した後、7月には京都大学東南アジア研究センター教授に着任した。白石教授の業績は、歴史的深みからインドネシアを中心とした東南アジア、さらにはアジアの政治秩序の有り様を浮かび上がらせたこと、更には東アジア共同体についてその底流で起きている社会・経

済・文化的な同一化の動きをいち早く捉えたことである。

インドネシア政治研究では、主著に *An Age in Motion*（1991年大平正芳記念賞受賞）、『インドネシア——国家と政治』（1992年サントリー学芸賞受賞）、『スカルノとスハルト』がある。また、東南アジア、広くはアジアに関する研究としては、カツェンスタインとの編著 *Network Power: Japan and Asia*、それに続く *Beyond Japan*、更には『海の帝国——アジアをどう考えるか』（2000年読売・吉野作造賞受賞）が代表的作品である。

こうした顕著な学術的業績と並んで、コーネル大学発行の *Indonesia* 誌の編集者（1987年～）、シンガポール



東南アジア研究所発行の *Sojourn* 誌（1999年～）の Advisory Board メンバーになるなど、東南アジア地域研究の学術的発展に努めた。さらに、国内では財務省・東アジア研究会委員、中央教育審議会大学分科会専門委員などの公的機関委員、読売新聞客員研究員などの民間団体の役職につき、日本と東南アジア関係について政策的提言を積極的に行ってきた。本受賞は東南アジア地域研究に対するこうした成果と貢献が高く評価されたことによる。なお、本研究所関係者の紫綬褒章の受章は、渡部忠世元所長（1987年）、石井米雄元所長（1995年）、立本成文元所長（2003年）に続く四人目である。

（文責：岡本 正明）

藤田幸一教授に 第一回樫山純三賞

藤田幸一教授の『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動——貧困削減のための基礎研究』（「地域研究叢書」16）が栄えある第一回樫山純

三賞に輝いた。

本賞は、財団法人樫山奨学財団が創立30周年を迎えるにあたり、創設者樫山純三氏の遺志を現代に生か



すものとして、社会科学分野の現代アジア研究における独創的で優れた業績を顕彰するため設けられたものである。第一回は、2004年1月から2006年3月末までに刊行された現代アジア研究に関する著作のうち推薦・応募等による図書50冊の中から、藤田教授と愛知県立大学大学院国際文化研究科の黄東蘭教授の2作品が選ばれた。

このたびの藤田教授の受賞は、1992年から足かけ10年以上にわたって行われた手堅い農村調査に基づき、根拠の薄い通説を真っ向から打破して新たな仮説を打ち立てた研究成果が高く評価されたもので、選考理由には「インド西ベンガル州ならびにバングラデシュの農村研究の

白眉ともいふべき秀作である。骨太の作業仮説を携えてフィールドに入り、フィールドでの精細な観察を通じて通説を次々と覆していく著者の手法は実に鮮やかである」と述べられている。

本書は、バングラデシュにおける1980年以降のコメ生産の急増（緑の革命）が農村社会の階層構造を分極化させたという通説は事実と合致しないとして退け、むしろ緑の革命は下層農を有利化したことを的確に論証している。また、インフォーマル金融の下層から上層への「逆流」を指摘し、ここでも旧来の農民層分級論に真っ向から対決する姿勢を示した。しかしながら一方で、小規模インフラにおいてさえ整備事業が容

易に進まないという同地域の限界をも見据え、その原因を強い絆を持った農村共同体の欠如に求めている。

藤田教授は、現在、南アジアのみならずミャンマーとラオスの農村経済調査にも着手し、ミャンマーに関してはその成果が2005年に編著『ミャンマー移行経済の変容』としてアジア経済研究所より刊行された。同教授の研究が今後さらに鋭く磨き上げられ、調査国の農村開発政策の策定にも一層裨益することを期待したい。

表彰式は、2月28日ホテルニューオータニで執り行われた。なお、本書は2005年に第9回「国際開発研究 大来賞」を受賞しており、今回の受賞によって評価はさらに高まったと言えよう。

荣誉 *Award Winner*



State and Society in the Philippines

by Drs. Abinales and Amoroso has been selected as a *Choice Outstanding Academic Title* for 2006

Every January, *Choice*, a publication of the Association of College and Research Libraries (ACRL), a division of the American Library Association, publishes a list of about 70 works which it considers to be “the best in scholarly titles” among the 7,000 or so that it reviews every year. The list is called the “Outstanding Academic Titles,” which includes both print and electronic publications.

In January 2007, *Choice* included the book *State and Society in the Philippines* (Rowman and Little-

field, 2005), which is co-authored by CSEAS Associate Professor Patricio N. Abinales and Dr. Donna J. Amoroso, associate professor at the National Graduate Institute for Policy Studies (GRIPS) in Tokyo as part of the list. A reviewer described the book as “The most comprehensive political history of the Philippines to appear in print,” and described it as a “Highly recommended piece.”

▶ Dr. Abinales in front of the portrait of Manuel L. Quezon, President of the Philippine Commonwealth, Malacanang Palace.



地域研究コンソーシアム年次集会

2006年11月25日、地域研究コンソーシアムの年次集会が、東京のキャンパスイノベーションセンター国際会議場にて開催された。西井涼子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)委員長の新体制になって1年目の年次集会である。活動報告(2006年1～11月)では、委員長から、加盟組織数が71(3増)となったこと、これまでの4部会・3研究会体制を廃止し、4月からは運営委員会を含む7作業部会・3研究会・事務局に活動領域を再編・重点化したことなどが報告された。その後、Web・メルマガ作業部会、次

世代育成作業部会、社会連携作業部会、情報資源共有化研究会をはじめ、各作業部会や研究会の活動報告がなされた。

また第二部では、「研究史としての日本の地域研究——戦前、戦後、そして未来へ」と題して、シンポジウムが開催された。戦前から今日に至る日本の地域研究を跡付け、その問題点と特色などを客観化する努力を払った上で、今後の日本の地域研究がたどるべき道を考察する、という趣旨で、パネラーとコメンテーターとして、以下の方々を招き、活発な意見交換がなされた。

●パネラー

毛里 和子氏(早稲田大学)
赤堀 雅幸氏(上智大学)
岡 洋樹氏(東北大学)

●コメンテーター

大塚 和夫氏(東京外国語大学)
関本 照夫氏(東京大学)

また、翌日の午前中、連携シンポジウム「情報資源共有化の現状と課題」が同じ会場で開催された。

(文責：藤田 幸一)



国際ワークショップ 東南アジアにおける科学技術コミュニティ形成

International Workshop “International Collaboration for Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia”

2007年2月12～14日、バンコクのレンブラントホテルにおいて、国際ワークショップ“International Collaboration for Formation and Development of Science and Technology Community in Southeast Asia”が日本学術振興会の主催で開催された。日本の大学と東南アジア諸国との学術交流はすでに半世紀近い歴史があるが、とりわけこの10年間で、交流分野が多様化するととも

に、研究のみならず教育面での協力も大きく進展した。このような状況を踏まえて、アジアにおける科学技術コミュニティをさらに強化するための方策について、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナムの政策担当者や研究者、国内からは本学に加えて、東京大学、大阪大学、東京工業大学、早稲田大学、長崎大学の関係者が参加し、意見交換した。本学からは、横山俊夫副学長が、社会

と文化を相互に尊重することを基調としながら発展させてきた京都大学の学術交流の歴史と実績、さらにバンコクとジャカルタを拠点とする将来構想について“Enhancing Kyoto University’s Language- and Culture-Conscious Collaborations with Southeast Asian Institutions of Science and Technology”と題して発表し、高い評価を得た。

(文責：河野 泰之)

International Workshop “Building East Asian Networks on Southeast Asian Studies”

2007年3月14日、“Building East Asian Networks on Southeast Asian Studies”（東南アジア研究をめぐる東アジアネットワークの構築）をテーマに、国際ワークショップが開催された。当日のプログラム（報告と報告者）は次の通りである。

第一部：東南アジアと南中国（雲南）

1. “Venturing into ‘Barbarous’ Regions: Trans-border Trade among Migrant Yunnanese between Thailand and Burma, 1960s-1980s,” Chang Wen-Chin (Center for Asia-Pacific Area Studies, Academia Sinica)

2. “Southeast Asian Studies in Yunnan: A Brief Introduction,” Kong Jianxun (Yunnan Institute of Southeast Asian Studies)

第二部：東アジアにおける東南アジア研究

3. “Change and Development of Southeast Asian Studies in Taiwan,” Soong Jenn-Jaw (Graduate Institute of Political Economy, National Cheng Kung University)

4. “Southeast Asian Studies in China: Progresses and Challenges,” Liao Shao-lian (Center for Southeast Asian Studies, Xiamen University)

このワークショップは、去る2005年10月、東南アジア研究所創立40周年の機会に開催されたワークショップに引き続き、近年興隆がめざましい東アジアの東南アジア研究との連携を強化すべく企画された。短時間ではあったが、ダイナミックに展開する東アジア各地の東南アジア研究の一端を直接うかがうことができ、今後の研究交流を展望する上で有意義な機会となった。

（文責：小泉 順子）



International Workshop “Indonesian Chinese Studies at the Crossroads? Challenges and Prospects”

2月12日と13日の2日間にかけて、アムステルダムのオランダ戦争資料館（NIOD）にて行われた“Indonesian Chinese Studies at the Crossroads? Challenges and Prospects”に、水野所長とともに参加した。この研究会は、NIODのピーター・ポスト氏を中心に、昨年よりインドネシア、日本で開催された一連の研究会の延長線上にあり、これまで行われてきたビジネスエリート研究以外の華人研究の可能性の追求と、オランダ、インドネシア内外のイン

ドネシア華人研究者のネットワーク形成を目的としている。今回は、インドネシア華人研究を行っている日蘭両国の研究者が集まり、①政治と法のレンズ、②トランスナショナル・ビジネス・ネットワーク、③華人アイデンティティ、④植民地期のビジネスと貿易、の4セッションを通して、さまざまな角度からディスカッションが行われた。日本からは所員の水野、北村の他に、企画者の一人である相沢伸広氏（政策研究大学院大学）、山本信人氏（慶応大学）、泉

川普氏（広島大学）、林陽子氏（立教大学）が発表した。発表者以外には、オランダ在住のインドネシア華人協会の方々や、オランダの大学に留学中のインドネシアやシンガポール出身の大学院生が参加し、約40名がラウンドテーブルを囲んで意見交換を行った。普段会うことのできない、オランダ在住のインドネシア華人の方々とのテーブルトークの会話を含め、インドネシア華人研究の今後の広がりが楽しみになる研究会であった。（文責：北村 由美）

京都大学附置研究所・センター シンポジウム「京都からの提言」開催

湯川・朝永両博士の生誕 100 周年に因んで、京都大学附置研究所・センター群は、湯川・朝永両博士が拓いた世界を考えそして 21 世紀の日本を考えようと、2007 年 3 月 17 日大阪市のエル・おおさかにおいてシンポジウムを開催した。

1949 年の湯川博士ノーベル賞受賞後、湯川博士や朝永博士は、1953 年に基礎物理学研究所を設立し、若手研究者の自由な発想を生かした萌芽的研究を大いに支援した。これによって発展への一步を踏み出した分野は、生物物理、宇宙物理、プラズマ科学など数多くあった。3 月 17 日のシンポジウムは、これらの研究の今日的成果の紹介の場でもあった。当日、基礎物理学研究所の九後所長は、「湯川・朝永両博士が残した宿題」として、今日の素粒子論を論じた。原

子炉実験所の代谷所長は、中性子を用いたがん治療などの中性子科学が拓く新しい世界を紹介した。また、霊長類研究所の松沢所長は、チンパンジー研究の成果から人類の起源に迫った。さらに、松本京都大学副学長は、宇宙エネルギー利用について紹介した。パネルディスカッション「科学技術立国と科学者の社会的責任」では、水野が東南アジア研究所所長として、科学者が自らの研究内容の社会的意味合いを問うのみならず、科学者は法の支配が欠如するなどのアジアやアフリカの現実を踏まえて研究を行う責任があると論じた。会場一杯に詰め掛けた 600 人の聴衆は、時には難しくなる議論にも熱心に耳を傾け、報告者に対して活発に質問し、報告者との間で討論が行われた。
(文責：水野 広祐)



ワーキングペーパー シリーズ始まる

このたび、東南アジア研究所、アフリカ地域研究資料センター、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、地域研究統合情報センターの、京都大学キャンパスの地域研究関連四部局の教員・研究者・大学院生の研究発表の場として、“Kyoto Working Papers on Area Studies”を立ち上げ

た。言語を問わず、地域研究に関わる論考で、アイデア段階で議論の素材としたいもの、ジャーナルへの投稿前・投稿中の論文、論文までは至らないが資料や分析の提示、などを発表する場としたい。是非、ご活用下さい。詳しいことは、各部局編集担当者へお問い合わせ下さい。



出版ニュース

◆『東南アジア研究』44巻3号

Southeast Asian Studies 44 (3)

Redefining “Otherness” from Northern Thailand ▼ Introduction: Notes Towards Debating Multiculturalism in Thailand and Beyond. Hayami Yoko ▼ Creating the Other Requires Defining Thainess against Which the Other Can Exist: Early-Twentieth Century Definitions. Ronald D. Renard ▼ Changing Meaning of the Elderly in Nan Province, Northern Thailand: From “Khon Thao Khon Kae” to “Phu Sung Ayu.” Baba Yuji ▼ Hui Yunnanese Migratory History in Relation to the Han Yunnanese and Ethnic Resurgence in Northern Thailand. Wang Liulan ▼ The Rise and Fall of the Tribal Research Institute (TRI): “Hill Tribe” Policy and Studies in Thailand. Kwanchewan Buadaeng ▼ Negotiating Ethnic Representation between Self and Other: The Case of Karen and Eco-tourism in Thailand. Hayami Yoko ▽書評 (Book Review) “Interface of the Local and Global: Reframing Understanding of the Hmong” Nicholas Tapp. *The Hmong of China: Context, Agency and the Imaginary*. Nicholas Tapp, Jean Michaud, Christian Culas and Gary Yia Lee, eds. *Hmong/Miao in Asia*. Lilao Bouapao. *Rural Development in Lao PDR: Managing Projects for Integrated Sustainable Livelihoods*. Nathan Badenoch ▼ Karel Steenbrink. *Catholics in Indonesia: A Documented History, 1808-1942, Vol. 1: A Modest Recovery, 1808-1903*. Andrew L. Abalihin ▼ 青山和佳. 『貧困の民族誌——フィリピン・ダバオ市のサマの生活』石井正子 ▽現地通信 (Field Report) 『「伝える人」になるために——ラオス^{じかたもんじよ}地方文書探索の旅から』増原善之

◆『東南アジア研究』44巻4号

Southeast Asian Studies 44 (4)

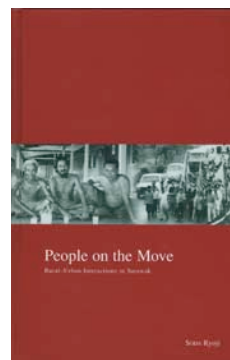
「マレーシアにおける社会科学の形成と展開——『ブルーラル』概念史」井口由布 ▼ Patterns of State Interaction with Islamic Movements in Malaysia during the Formative Years of Islamic Resurgence. Ahmad Fauzi Abdul Hamid ▼ On the Margins of the “Economic Miracle”: Non English-Literate Chinese Factory Workers in Singapore, 1980-90. Ernest Koh Wee Song ▼ Communication Variables Favoring Celebrity Candidates in Becoming Politicians: A Case Study of the 1998 and

2004 Elections in the Philippines. Elmina Rayah Dizon Maniago ▼ Access to Land in Sundanese Community: A Case Study of Upland Peasant Households in Kemang Village, West Java, Indonesia. Siti Sugiah M. Mugniesyah and Mizuno Kosuke

People on the Move

Rural-Urban Interactions in Sarawak

このほど祖田亮次 著 *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak* を Kyoto Area Studies on Asia シリーズ Vol. 13 として刊行した。祖田亮次氏は北海道大学文学部准教授。本書は、マレーシアサラワク州での10年にわたる着実なフィールドワークに基づいて、イバン人の都市への流入（移出）という現在顕著に見られる事象を多角的に追求しており、そのエスノグラフィックな記述と議論、なかでも都市への migration というよりも生活空間の拡大と捉えるという視点は、ボルネオ、東南アジア島嶼部のみならず、さまざまな社会の「人の移動」研究への重要な貢献をなすものである。



購入に関する問い合わせは、
京都大学学術出版会
電話：075-761-6182
FAX：075-761-6190
sales@kyoto-up.or.jp まで。

◆研究報告書シリーズ (Research Report Series)

- No.113. 2006年度東南アジアセミナー実行委員会(編). 2007. 『受講生からの声』
- No.114. 柴山 守・米澤 剛(編). 2007. 『シンポジウム「地域研究と情報学——新たな地平を拓く」講演論文集』

◆Bibliography Series

- No.1 京都大学東南アジア研究所図書室. 2006. 『京都大学東南アジア研究所図書室所蔵マイクロ資料目録逐次刊行物編』

人事

教員人事

<新任>

小林 知 助教

(2007年4月1日付)

1996年大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒。同年京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程入学、98年同研究科博士課程へ進学。2003年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程へ転入学、05年同研究科博士課程を単位取得退学(07年同大学博士号取得)。05年京都大学東南アジア研究所日本学術振興会特別研究員PD、06年京都大学地域研究統合情報センター日本学術振興会特別研究員PD。

[主要論文]

▽An Ethnographic Study on the Reconstruction of Buddhist Practice in Two Cambodian Temples: With the Special Reference to Buddhist *Samay* and *Boran*. *Southeast Asian Studies* 42 (4), 2005. ▽「カンボジア、トンレサープ湖東岸地域農村における集落の解体と再編——村落社会の1970年以降の歴史経験の検証」『東南アジア研究』43 (3), 2005. ▽「ポル・ポト時代以降のカンボジアにおける農地所有の編成過程——トンレサープ湖東岸地域農村の事例」『アジア・アフリカ地域研究』6 (2), 2007.

<国内客員部門>

任期 2007年4月1日～2008年3月31日。

白石 隆政策研究大学院大学教授は再任。

永淵 康之 教授

(2007年4月1日付)

1982年大阪大学人間科学部卒。88年大阪大学大学院人間科学研究科後期課程退学(2004年同大学博士号取得)、88年大阪大学人間科学部人類学講座助手。89年名古屋工業大学専任講師、94年同大学助教授。2003年名古屋工業大学大学院工学研究科助教授、05年同大学院工学研究科教授。

[主要著書・論文]

▽『バリ島』講談社、1998. ▽「宗教と多元化する価値——インドネシアにおけるヒンドゥーをめぐる境界線を定める闘争」『国立民族学博物館研究報告』29 (3), 2005. ▽『バリ・宗教・国家——インドネシアと少数派ヒンドゥー』(仮) 青土社、2007 (印刷中).



外国人研究者人事

◆外国人研究員

Khampitak Kovit (タイ)。コンケン大学医学部准教授。2006年12月1日～2007年5月31日。「タイ高齢者と日本人高齢者の総合機能評価」

Rufa Cagoco-Guiam (フィリピン)。ミンダナオ州立大学准教授。2006年12月15日～2007年6月14日。「地方政治における平和構築、民主化、統治——ムスリム・ミンダナオ自治区における市民社会組織の役割と参加に関する状況分析」



Surithong Srisa-ard (タイ)。シリントン・イサン・インフォメーションセンター・センター長。2007年3月14日～9月13日。「『教育発展のための地域知・地域情報』に関する教科書執筆」



Lye Tuck Po (マレーシア)。ナガ調査研究所研究員。2007年4月1日～9月30日。「カンボジア、サンボール・プレイ・クにおける環境・知識・記憶」



庄国土 (Zhuang Guotu) (中華人民共和国)。廈門大学東南アジア研究院教授。2007年5月1日～10月31日。「東南アジアにおける新華僑——中国・ASEAN間における中国人資本フローの文脈を踏まえて」

◆招へい外国人学者

Witoon Buadaeng (タイ)。チェンマイ大学客員講師。2006年10月1日～2007年3月31日。「神話と儀礼——日タイの映像人類学的比較」

Siti Sugiah Mughiahneiesyah/Dwi Rachmina (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2007年1月31日～2月15日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

Sri Hartoyo (同)。同大学経営経済学部開発研究科長。同。「同」

Chaiwat Thirapantu (タイ)。Civinet Institute 会長。2007年4月1日～8月31日。「市民社会における物事を変える力を持つリーダーシップの育成とアジアの社会変革のためのエネルギー分野の共同育成」

◆外国人共同研究者

Kong Jianxun (中華人民共和国)。中国雲南省社会科学院 東南アジア研究所研究者。2006年12月25日～2007年 3月24日。「タイ国と日本の一品一村運動の比較研究」

事務職員人事 (4月1日付)

□山本正躬専門員は、3月31日付で定年退職。後任に 窪田耕治奈良教育大学学生支援課副課長。

□竹内照夫会計掛長は、教育学研究科専門職員 (会計掛) へ配置換。後任の専門職員 (会計掛) には、寺田雅夫ウ イルス研究所会計掛長。

東風南信 Reflections

『中国農業史』 古川久雄

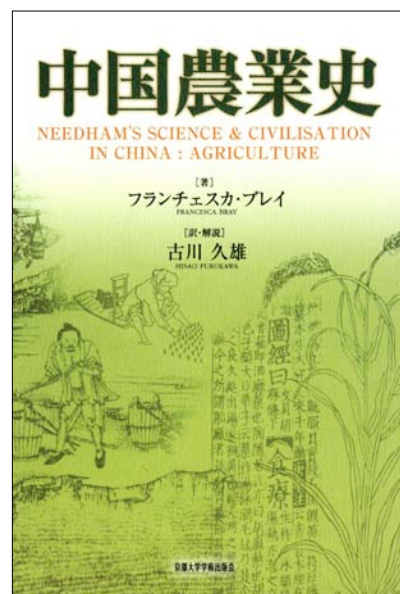
まず宣伝ですが、2007年3月に ニーダム・シリーズの1冊を『中国 農業史』として翻訳、京都大学学術出 版会から出版しました。ニーダム・シ リーズとここでいうのはイギリスの ジョセフ・ニーダムが1954年に出版 を始めた *Science and Civilisation in China* のことです。近代以前の 科学と技術の場面で中国が行った貢 献をくまなく洗い出し、さらにアジ アとヨーロッパの交流を鳥瞰しよう という壮大な目的のもとに開始され、 1995年にニーダムが亡くなった 現在も継続され、Vol. VII Part 1 に至っています。日本語への翻訳は Vol. IV Part 3 までが東畑精一・藪 内清の監修で思索社から11冊出版 されていますが、1981年で途切れ てしまいました。この11冊は序篇、 思想史、数学、天の科学、地の科学、 物理学、機械工学、土木工学、航海 技術をカバーしていますが、その後 も続いている出版は、紙と印刷技術、 錬金術 (4分冊)、軍事技術 (ミサイ ルと包囲、火薬の2分冊)、織物、鋳 業、生物学と生物技術 (生物学、農 業、農村産業と林業、発酵と食品技 術、薬品の5分冊)、社会の性格と、 魅力的な本が続々と生まれています。

今回翻訳したのは上記 Vol. VI 生 物学と生物技術の中の農業に関する 1巻で、図版271、表13を含む本文 616ページ (訳書は693ページ)、19

世紀以前の漢籍、19世紀以後の 中国語、日本語文献、ギリシア・ロー マ以来の欧語文献リストが53ペー ジ、詳細を極める索引が40ペー ジに及ぶ大部の本です。内容に則して 訳本タイトルは『中国農業史』とし ました。著者の Francesca Bray は多 分30代半ばでこの大部の本を書き 上げたと思われます。しかもアジア でのフィールドの経験はマレーシア のケランタンの村で1年間稲作農業 を見たことと、中国、日本の短期間 の旅行があるだけで、あとは文献に よって中国農業の多様な主題を網羅 した本書を書き上げたわけで、それ にしてはよく書けていると感心させ られます。

エライと思うのは、とにかく全体 像を描くという決意の堅さです。集 められる限りの情報は集め、メリハ リをつけた主題に分け、しかも特殊 な学術書にしてしまうのでなく、一 般的な関心を引きうる作品になって います。全体像を出すためには、少々 のミスにこだわらずよく知らないこ ともドンドン取り入れる、そうやっ て作品全体の手触りを柔軟にし、学 問の領域も広げていく、その勇敢な 姿勢です。自分も学問も前進させよ うという気概が根底にあります。

研究のロジスティックという点で 日本との大きな違いも感じさせられ ました。それは研究材料の積み上げ



です。20巻を超えるニーダム・シ リーズの引用文献は本も論文もそれ ぞれに番号が打たれて蓄積され、多 分、東アジア科学史研究室に集めら れている様子です。例えば Pelliot, P. (8) という文献はニーダム・シリー ズのどの巻でも同じ文献を指します。 シリーズに参加した著者たちは既存 の材料を利用し、新たに利用した材 料は新たな番号を打って蓄積を増や す方式になっているようです。一つ の研究グループが一つの図書館を 作っていくといえるでしょう。この 蓄積性、継続性がゲマインシャフト を維持し、また広範な関心を集める 作品の高い生産性を維持していく基 盤だろうと思います。

(1978-98年東南アジア研究センター、 98-2003年大学院アジア・アフリカ地 域研究研究科在職。京都大学名誉教授)

Visitors' Views

How Local Tradition Embraces Globalization



Dorotea Agnes Rampisela

My time at CSEAS is truly a prolific time in my research career. It is simply a perfect place to become more productive under the supportive academic atmosphere. This is my second long stay at Kyoto, and coming back here has been like coming home. All of my old Kyoto friends are still the same nice people they were before. In most ways, therefore, it feels like time has frozen, nothing has changed.

However, one thing made me realize that 15 years had indeed passed: *sumo*. A few weeks ago, I had my first chance to watch live *sumo* wrestling. I went to Osaka with my son and daughter to watch Haru Basho. My favourite *yokozuna* Chiyonofuji was there, but he does not fight on the *dohyo* any more. He was sitting at the side as the head judge (*shinpan*).

It surprised me how internationalized this traditional game of Japan has become. Even though I knew that *yokozuna* Asa Shouryu is from Mongolia, the great number of non-Japanese nationality wrestlers (*rikishi*) was unexpected. Beside Mongolia, *rikishi* come from Russia, Korea, Bulgaria, Hawaii, etc. Moreover, half of the top 12 *rikishi* are non-Japanese.

I also learned that *sumo* could be a good way to really understand the participatory approach in rural development. For instance, *sumo* fans (*tanimachi*) actively express their enthusiasm for the game by providing ornamental apron *kesho mawashi* for their favorite *rikishi*. Private companies may participate by providing donations for voucher *shouken*. Furthermore, the five judges (*shinpan*) and four *rikishi* who are waiting their turn may interrupt the decisions (*mono ii*) made by the referee (*gunbai*).

The richness of Japanese culture also appears in the naming of *rikishi* and *gunbai*. Their professionalism is accounted for and articulated in the glamor and details

of their costumes. I believe that my stay in Kyoto and the collaborative work at CSEAS, Kyoto University, is my *chikara mizu* (strength water) for my further research work when I am back at Hasanudin University in Indonesia.

(Visiting Research Fellow)



Japan: From Original Culture to Modern City



Khampitak Kovit

I have had the best opportunity of my life being a visiting researcher at the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University. I have taken this opportunity to study about Japanese life, as well as to write and travel with my family. Japan, in my view, is the most developed country in Asia and can be further developed in the future. Yet Japan still has the beauty of its original culture which goes well with modernization.

My memory of the Japanese people from when I was young was the dedication of television superheroes who risked their lives to save the world from evil monsters. The Japanese believe that the gods of Shinto abide in nature, including big trees, rocks, and the sea, so people here love and care for nature. An example is the way they arrange and decorate their environment, gardens, and houses. I believe this also accounts for Japan's interest in producing nature-friendly products. And the Japanese people have clean and neat habits which make this country tidy and beautiful.

While in Kyoto, I have seen many traditional events, such as going to the shrine at New Year to make wishes. A lot of people get involved in traditional events that are held almost every month, things that make the Japanese spirit and culture strong.

At work, every Japanese organization has a good system of work assignment, while individual Japanese have a high sense of responsibility. When someone has been assigned a task, that person always bows and

says "Hai!" which I would translate as "I am willing to do my best at the job." Japanese people are also good at teamwork, in which they encourage and look after each other. Teamwork is one of the most important factors in Japan's rapid advance.

My final impression is that Japanese people are very friendly to foreigners. Everyone I met has been kind and very helpful. I would especially like to thank my counterpart, Prof. Dr. Kozo Matsubayashi; CSEAS director Prof. Dr. Kosuke Mizuno; and everyone who gave me this great chance for their kindness to me and my family while we lived in Kyoto.

(Visiting Research Fellow)



Wayward Media, Kyoto Style



Rufa Cagoco-Guam

Part of the adjustment that foreigners make in a country is getting used to rather strange sounds and sights. In my first few weeks in Kyoto, I had to come to terms with these strange sounds and even stranger ways of using a language I consider to be vital in international relations: English.

Puritan English grammarians will scream with horror at the way English is being used, or mangled, on many of Kyoto's signs and on bulletin board notices (the ones at Shugakuin International House really top the list). But I just find it endlessly amusing how Japanese Anglophiles insist on their own way of using English — to me this is an expression of self-determination, the linguistic way. For how else would you interpret Japanese proclivity for combining words that do not "belong" to each other? Who cares? As long as they understand each other, it doesn't really matter at all.

Here are some examples:

(Instructions for using the cooking device):
Do not use unavailable pots; only available pots are to be used for this heating equip-

ment. (Quite logical, don't you think?)

(*A sign for a beauty salon*): HAIR. CONFIRMATION (Take note of the dot after HAIR. And I wonder what they confirm there — that you still have hair to be cut???)

(*Another beauty salon*): HAIR FLOW (Reminds me of Rapunzel's hair).

CLIMB and GROW (I tried to peek inside to find out what it was. The menu board read "cut and perm, 3,000 yen; color, 4,500 yen," etc. It turned out to be another beauty salon, tsk, tsk...)

HAIR CLIP, and above it: FREAKS (Turns out to be another beauty salon — but I am too scared to go inside lest it run true to its name and I will look more hideous than before I entered!)

(*Instructions for finding a restaurant on the second floor*): Please go UP STEAR!

The most amusing was this response to an email: Rufa-san, thank you for your male!!!!

I am really having a nice time gathering all these amusing signs and notices. If you encounter others, please forward to me at guiam@cseas.kyoto-u.ac.jp. And when I respond, please do not thank me for my "male."

(Visiting Research Fellow)



Balanced



Dias Pradadimara

Perhaps the most repeated, and therefore clichéd, piece of advice is for one to live a balanced life. That is certainly something that I, as a recent inhabitant of Kyoto, would advise even more recent newcomers. And I mean this in a very practical way. As soon as I got my hands on my newly acquired used bicycle, I picked up my biking skills. Riding the bike itself was not a big problem. The challenge came when I realized that there are no bike lanes on

Kyoto streets. Instead, most people biked on the sidewalks. And that is where the fun starts.

To keep one's balance while biking in a straight lane is one thing, but to keep one's balance while maneuvering amidst pedestrians is quite another. For me, this constitutes a real challenge; I somehow have to anticipate the movement of a walker (or walkers) and decide which direction(s) to steer my bike to avoid running somebody over. I admire (most) Kyoto bikers who can maintain their balance without crashing into someone or something. And they even do this at times while holding umbrellas under the rain AND checking or typing SMS into cellphones!

Furthermore, every morning I have to take my 3-year old daughter from Shugakuin to her nursery school at the intersection of Shirakawa-dori and Marutamachi-dori. Now, my daughter is certainly not the type of child who would sit still and stay still. I think she does not realize that her father actually does not have eyes at the back of his head to see what she sees and to know what she is asking and talking about at every moment. She therefore just keeps doing what she is doing. And for me this means that the bike constantly wiggles and staggers from side to side while I desperately try to pedal it over hills and around corners. To make it even more fun, I have to make sure we do not hit an unsuspecting grandma trying to catch her bus or a student in a hurry or a group of tourists crossing the street on their way to Ginkakuji. Yet, thus far I manage. So I must have listened to the advice have given me: to keep my balance.

(Visiting Research Fellow)



Shrines and Temples in Kyoto



Kwanchewan Buadaeng

As a Visiting Research Fellow at the Center for Southeast Asian Studies, Kyoto

University, I lived in Kyoto from October 1, 2006 to March 31, 2007. Besides doing my project on the Karen and their religious movements on the Thailand-Myanmar frontier, I visited many shrines and temples, mostly in Kyoto, during the holidays. Observing festivals and rituals conducted by these shrines and temples gave me not only joy but interesting notions about Japanese religious practices.

There are many Shinto shrines in Kyoto, which remind me of the many shrines built for lords and guardian spirits in Chiang Mai, where I come from. But whereas worshipping spirits in Thailand is officially viewed as an irrational non-Buddhist practice, in Japan, shrines have a formally recognized status and have been widely acknowledged to play important roles in people's lives. Many shrines and temples in Japan have a history longer than one thousand years and have become UNESCO World Heritage sites. They are popular among domestic Japanese tourists, who visit in higher numbers than foreign tourists. I remember going to Kiyomizu temple during the red-leaves fall season, to find the narrow walking path and temple compound crowded with Japanese people from Kyoto and elsewhere.

Beautiful landscape and seasonal changes may be the first reason people like to visit shrines and temples, not only once but many times in their lives. Walking in the sacred and beautiful compound gives people aesthetics and relaxation. A more important reason is the role played by shrines and temples in everyday life. I have seen a traditional wedding ceremony organized in a famous shrine and, from viewing the graceful ritual procedures, realize that the ceremony must be meaningful for the bride and groom and their relatives. Each shrine and temple functions in different aspects of life, such as education, marriage, health, etc. One of the most impressive shrines I have visited in Kyoto is the one built in memory of the Japanese airplane inventor. This shrine is famous among pilots and those who travel by airplanes, who come to be blessed for safe travel.

It is interesting to see that religious institutions such as shrines and temples still play an important role in a modernized society like Japan. Although my understanding of how and why is still limited, my experience of visiting shrines and temples is most memorable. I must thank the CSEAS for giving me the great opportunity to concentrate on my own work and to gain such experiences here in Kyoto.

(Visiting Research Fellow)

Colloquia

“The Resurgence of Intra-Asian Trade: Towards a New Perspective of Nineteenth-Century Global History”

by Sugihara Kaoru,
October 26, 2006

The conventional understanding of the growth of the international economy has been “diffusionist,” in that it emanated from Britain and spread to the rest of the world. Modern Asian history has been written with this assumption in mind. This paper argues that the size of intra-Asian trade during the “long nineteenth century” was too large to be interpreted under such a framework, and that its growth was driven by local and regional initiatives, rather than by Western entrepreneurs. While the regime of forced free trade was imposed largely by Britain, the resurgence of Asian regional commerce, with its own logic of expansion, was fundamental to the growth of world trade.

“Plant Diversity in Paddy Field Landscapes in Central Laos”

by Kosaka Yasuyuki,
November 24, 2006

Biodiversity, particularly in human-managed ecosystems, has recently attracted considerable attention. The purpose of this study is to draw out the dynamic aspects of the relationship between local people and plant resources, and to determine how people’s practices influence ecological processes in paddy field landscapes in Laos. Field surveys showed that various trees were left in paddy fields and supplied essential resources in forest-deprived villages. Mul-

tiple herbaceous plants, including useful species and rare species, also grew in paddy fields despite “disturbances” caused by human agricultural practices. The result has implications for effective land-use planning in paddy field landscapes.

“The Museum as Representation of ‘Ethnicity’: Visualization of Chinese Indonesians in the Post Suharto Era”

by Kitamura Yumi,
December 21, 2006

“Ethnicities” are visualized on various occasions and in different formats in Indonesia, such as in decorations in shopping malls, costumes during election campaigns, and so forth. Further, they are visualized with the intention to convey specific messages depending on the context. Among the few hundred ethnicities in Indonesia, however, is one that was not allowed to represent itself for over thirty years, namely the “Chinese.” This presentation introduced an ongoing plan to build a Chinese Indonesian Museum in the Taman Mini Beautiful Indonesia. Though the museum case is paradoxical because of its location and contents, the presentation explained why and how the “Ethnic Chinese” is being created in post Suharto Indonesia.

“Spatial Revelations”

by Caverlee Cary,
January 25, 2007

An upcoming workshop at the National Museum of Bangkok will explore ways in which Buddhist teachings about space have

been visually realized. Entitled “The Map and the World,” the program will bring together an international cohort of participants. Part of the project involves the compilation, annotation, and distribution of related images.

This talk offered a selection of Buddhist cosmic imagery, and images of how humanity is mapped within the greater whole. Examples suggest not only issues relating to the representation of Buddhist texts, but in some cases negotiate established norms of Buddhist imagery with external cartographic traditions.

“3-D Modeling of Geologic Structures and Its Application to Area Studies”

by Yonezawa Go,
February 22, 2007

Geologic information plays an important role in the fields of civil engineering, construction, and environmental preservation. Various studies have been undertaken to construct a 3-D model of geologic structure for practical use. 3-D modeling of geologic structure is composed of two elements: the logical model of geologic structure and the gridded surfaces (DEM, or Digital Elevation Model). If the two elements are given, the geologic function that assigns the geologic unit to every point in space T can be defined uniquely. Based on this geologic function, the distribution of geologic units can be visualized on an objective surface including the topographic surface and the vertical section by classifying them with different colors. In this presentation, I explained the concept for construction of this 3-D modeling of geologic structure and its application to area studies.

“Occupational Change and Upward Mobility of Urban Low-Income Residents in Bangkok”

by Endo Tamaki,
March 22, 2007

Contrary to the arguments of earlier works in development studies, the informal economy has expanded as globalization marches on. This presentation analyzed the occupational changes and upward mobility of urban low-income residents in Bangkok using macro and micro data, including field survey in the communities. From the macro perspective, it examined the interaction between occupational changes or experiences of residents and macro economic/labour

restructuring that has been going on since the mid-1980s. From a micro perspective, it investigated the occupational experiences of individuals by analyzing life courses and risk management processes (e.g., firing, laying-off of workers, etc). It showed that the actual patterns of occupational mobility differ from the assumptions of traditional theories of development studies and policy makers, albeit defined by the Thai context.

2007年度科研費プロジェクト・リスト

■基盤研究(S)

- 2005-09 年度
- 地域情報学の創出
——東南アジア地域を中心にして
- 研究代表者:柴山 守

■基盤研究(S)

- 2007-11 年度
- 東南アジアで越境する感染症
——多角的要因解析に基づく地域特異性の解明
- 研究代表者:西淵 光昭

■基盤研究(A)海外学術調査

- 2005-07 年度
- 東南アジアの「若い」の総合的研究
——セーフティ・ネット制度再構築に向けて
- 研究代表者:松林 公蔵

■基盤研究(A)海外学術調査

- 2005-08 年度
- ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発——持続的発展の可能性
- 研究代表者:安藤 和雄

■基盤研究(A)海外学術調査

- 2007-10 年度
- 東南アジアの「非伝統的」安全保障
——国家の対処能力と地域協力体制の現状と課題
- 研究代表者:Patricio N. Abinales

■基盤研究(A)海外学術調査

- 2007-10 年度

- アジアにおける稀少生態資源の攪乱動態と伝統技術保全へのエコポリティクス

- 研究代表者:山田 勇

■基盤研究(B)

- 2006-09 年度
- 東南アジア大陸部における土地利用変化のメカニズム——フィールドワークとRSの結合
- 研究代表者:河野 泰之

■基盤研究(B)

- 2006-08 年度
- インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究
- 研究代表者:杉原 薫

■基盤研究(B)海外学術調査

- 2005-07 年度
- 民主化・分権化後のインドネシアにおける地方政治経済構造の変容
- 研究代表者:水野 広祐

■基盤研究(C)

- 2007-08 年度
- 半乾燥地における水資源管理の変容が農業水利及び地下水涵養に与える影響評価
- 研究代表者:佐藤 孝宏

■萌芽研究

- 2006-07 年度
- 環ヒマラヤ地域と日本における農具収集と住民参加型資料館ネットワーク形成

- 研究代表者:安藤 和雄

■萌芽研究

- 2007-08 年度
- 防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して——コミットメントの経験から
- 研究代表者:清水 展

■萌芽研究

- 2007-08 年度
- 戦前期タイ・中国外交関係に関する基礎史料研究
- 研究代表者:小泉 順子

■若手研究(B)

- 2005-07 年度
- マカッサル海峡島嶼部地域におけるインドネシア地方分権下の生活世界
- 研究代表者:浜元 聡子

■若手研究(B)

- 2007-10 年度
- ラオスの水田景観における植物多様性保全に関する研究
- 研究代表者:小坂 康之

■若手研究(B)

- 2007-08 年度
- 地質情報を基盤とした東南アジア地域の地下と地上をつなぐ空間情報処理システムの構築
- 研究代表者:米澤 剛

ニューギニアに 多発する神経難病

松林公蔵

神経難病の中には、アルツハイマー病（日本全国で約150万人）、パーキンソン病（約15万人）に比べて頻度は希ですが、筋萎縮性側索硬化症（略称:ALS）（約7千人）という病気があります。ALSは、腕、足の筋肉が進行性に萎縮し、やがて嚥下が困難となり、ついに呼吸筋も動かなくなる恐ろしい病気です。19世紀にフランスの神経学者シャルコーによってその存在が確認されてから約150年になりますが、現在にいたるまで原因も不明で根本的な治療法がありません。通常、発病して平均2～3年で亡くなります。気管切開を受けて人工呼吸器を装着すれば、患者はかなり長く生きることができ、まったく筋肉を動かすことができず、コミュニケーションにもたいへん困難を伴います。神経病の「完全犯罪」ともいわれ、も

しも神が人間に対して、「ひとつの病気の治療法を与える」といわれれば、すべての神経内科医がこの病気の治療を願うことでしょうか。ALSで亡くなった有名人としては、ニューヨーク・ヤンキースの名4番打者ルー・ゲーリック、ロシアの音楽家ショスタコビッチなどが知られております。病型はややマイルドですが、宇宙物理学者のホーキング博士が、コンピュータを通じて会話する姿をご存知のかたも多いと思います。

この希な難病が、西ニューギニアで多発するが遺伝性ではないことをガジュセクという神経学者が1970年代に発見し、後に彼はその業績によって医学生理学部門のノーベル賞を受賞しました。しかし1980年代後半以降、西ニューギニアには外国人研究者が入れなくなったため、その後の実態については不明でありました。

私たちは、1997年から西ニューギニアに入る努力を重ね、2002年と2007年の医学調査で、この疾患が、いまだに高い頻度で存在することを確認しました(写真)。ある地域に原因不明の疾患が多発するという事実はその原因にせまるヒントを与えてくれます。完全な解明は容易ではないと思いますが、地道な研究を続けてゆきたいと思います。

(研究所教授)



ALS (53 yr male, Hionolikiya)
53歳のALS患者
(西ニューギニア—現バブア州)

ジャカルタを遠く 離れて

吉田 信

約半年にわたるジャカルタ事務所での駐在を終え帰国したが、夢見心地の気分がなかなか抜けきれずにい

る。事務所の仕事は当初予想していたよりも煩雑で大変だった。車検証更新トラブルにはじまり、新車の購

入。予算の制約を受けた車両購入は、車両保険のことを考慮に入れずこの費用捻出にも頭を悩ませた。運営費

が圧迫するなかでの保険代の捻出は、経費節減をとまなわざるをえない。事務所の運転手やお手伝いさんは、歴代中最もけちな人物として私を記憶しているに違いあるまい。

駐在中の出来事としては、なんといっても2月の洪水だろう。降り続いた雨は気がつくジャカルタ市内各地を一夜にして水浸しにした。交通網のみならず固定電話をはじめとする通信網も寸断された。洪水は貴賤を選ばない。金持ちの集まる新興住宅街クラバガディンも水浸しになった。2002年よりも大きな被害をもたらしたこの洪水を、テレビではレポーターが胸まで水に浸かりな

がら中継をしていた。その後ろで子供が歓喜しながら水に飛び込む光景とともに……。インドネシアを理解する鍵はここにある、と思うべきか、ただ困惑すべきなのか、私にはもはやその判断すらつかなかった。

植民地期の歴史を調べている者にとって、ジャカルタは格別な場所である。コタ地区をはじめジャカルタ周辺に残る植民地期の遺産をめぐるとは、悪名高い渋滞にもかかわらず外出を決意させる強い動機となった。しかし、多くの建築物の荒れ果て様には、悲しい思いも抱かされた。旧西インドのスリナムやキュラソーでは、これら植民地期の建築物は整備され、

世界遺産として登録・保存されている。ジャカルタでも観光資源として活用できる可能性があるのではないか。急ピッチで進む公共事業や民間の高層アパート群を見るたびに、その思いは募った。植民地期の遺産は目に見えない形でも継承されている。国籍法の改正はその一例であり、植民地期と独立後の連続性を考えるうえで、興味深いケースであった。

トラブル続きの半年ではあったが、土産話も研究テーマもそれなりに仕込むことができた。駐在の機会をいただき、関係の方々に心から感謝する次第である。

(福岡女子大学准教授)

BANGKOK

連絡事務所だより *Letter from Liaison Office*

日タイ修好120周年

中口 義次

1887年に日タイ修好宣言が調印されてから120年。2007年は日タイ修好120周年の節目の年である。日本とタイの交流の歴史は約600年前にさかのぼり、琉球王朝とアユタヤ王朝の交易にはじまるといわれている。その後、アユタヤの日本人町、朱印船、山田長政などの史料でその交流を知ることができる。今年、記念事業実行委員会が発足し、様々な記念事業が計画されている。外務省や在タイ日本大使館のHPでその告知がなされ、日本とタイの間の様々な分野における交流の推進、相互理解の増進を目指している。今年開催される日本タイ両国に関する催しをこの記念事業に登録すると、日タイ修好120周年記念事業のカレンダーに掲載され、ロゴマークの使用が可能となり、宣伝効果も期待される。事業の内容は、文化芸術、スポーツ、

青少年教育、地域交流・草の根と多種多様にわたっている。

日タイ修好120周年に関連した内容の映画とTVドラマを紹介したい。一つは、日本とタイの文化が融合する人物である山田長政にスポットライトを当てた映画「YAMADA-THE SAMURAI OF AYUTHAYA」である。この映画は、江戸時代前期に朱印船でアユタヤへ渡り、日本人町の頭領になり、外国人でありながらアユタヤ王朝の国王ソムタムの高い信頼を得た山田長政の「日本人としての誇りと義」を描き出そうとしている。

もう一つ、日タイ修好120周年記念のTVドラマとして、「ファーとタウン(英題:ヒロシマ・スカイ)」の放送が予定されている。これは、日本を舞台としたタイ人の若い男女が主人公で、広島のお好み焼き?が取り持つラブストーリー。主演女優

はタイのスーパースターのポーラ・テイラー、CMなどでよく見かける女優だ。実は……、バンコク連絡事務所駐在中に、このドラマに一言の台詞付きで出演してしまった。出演といっても数シーンのエキストラなのだが、撮影現場の緊張感を間近で感じ、タイ人俳優の真剣な演技に圧倒された。制作サイドの意向で様々な役を演じることになったが、幸いなことにNGはなかった。一言の台詞と演技でもって、日タイの交流に僅かながらも貢献できた気もする。その台詞を紹介すると役柄がわかってしまうので書かないことにする。ドラマの放送は2007年7月から9月の予定。

初めてのバンコクで、いろいろなことがあった4カ月の駐在、私の日タイ交流史はまだ始まったばかりだ。(研究所助教)

研究会

◆ Special Seminar

Dias Pradadimara (Visiting Research Fellow, CSEAS) "Agrarian Relations in Upland Sulawesi: The Case of Tana Toraja," January 22. ▼Kwanchewan Buadaeng (Visiting Research Fellow, CSEAS) "Letters of Contestation: Leke Religious Cult among the Karens in Myanmar and Thailand," March 23.

◆「地域情報学」研究会

第2回:10月29日 柴山守 (CSEAS)・原正一郎 (CIAS)・奥村英央 (ヒューマンウォーク) 「GIS—時空間システム概要とメタ情報」▽相田満 (国文学研究資料館) 「暦及び地名知識データベースの構築」▽原正一郎 「奈良・京都盆地における神社位置と景観の空間分析」

◆「山地研究会」

第2回:11月10日 Punya Prasad Regmi (Visiting Professor, Hiroshima University) "Mountain Resources and Sustainable Livelihoods in Hindu Kush-Himalayan Region"

◆拠点大学交流事業特別セミナー

(共同研究8「変貌する『家族』」主催)

January 12 Yaowalak Apichatvullop (Khon Kaen University) and Patcharin Lapanun (Khon Kaen University) "Cross-Cultural Marriages in Isaan Society: State of the Knowledge"

(共同研究9「アジア国際経済秩序」主催、「国家・市場・共同体」研究会共催) "The Asian International Economic Order' Labour-intensive Industrialisation in Southeast Asia," March 15

Porphant Ouyyanont (Sukhothai Thammarathirath Open University) "Cheap Labour and the Industrialisation of Bangkok after 1945" Discussant: Sugihara Kaoru (CSEAS) ▼Mya Than (Chulalongkorn University) "Myanmar's Transitional Economy and the Regional Divide" Dis-

ussant: Okamoto Ikuko (Institute of Developing Economies)

◆「国家・市場・共同体」研究会

11月15日 "NGOs and Local Governments in Indonesia: Friends, Foes, or (just) Neighbours?"

Roem Topatimasang (INSIST NGO) "Indonesian Various NGOs: How Effective?" ▼Arusdin Bone (LP₂G NGO) "Challenges for NGOs in a New Province: Experience from the Field" ▼11月28日 古市剛久 (オーストラリア国立大学) 「ミャンマー・インレー湖流域の土壌浸食及び土砂堆積」▼3月20日 「東南アジア移行経済におけるマイクロファイナンスと農村社会変動」

海野朝子 (東京大学) 「ミャンマーにおけるマイクロファイナンスの特徴と問題点—金融機関と中部ドライゾーン農村家計へのインタビュー調査結果を中心に」 コメントーター:松田正彦 (立命館大学) ▼岡江恭史 (農林水産省) 「ベトナム農村における銀行融資をめぐる社会関係」 コメントーター:柳澤雅之 (CIAS) ▼モデレーター:藤田幸一 (CSEAS)

◆「アジアの政治・経済・歴史」研究会

第7回:12月15日 Pierre Van der Eng (ANU) "De-industrialisation and Colonial Rule: The Cotton Textile Industry in Indonesia, 1820-1942"

◆「東南アジアの社会と文化」研究会

第29回例会:11月17日 加藤真理子 (ASAFAS) 「サラバン仏教賛歌—東北タイ農村における女性の宗教実践と社会変容」▼第30回例会 (東南アジア学会関西地区1月例会との共催):1月19日 木村幹 (神戸大学) 「地域研究への方法論的模索—韓国研究を中心に」▼第31回例会:3月23日 石井正子 (CIAS) 「フィリピンの女性労働政策

—『海外労働者の女性化』が与える影響について」

◆「次世代の地域研究」研究会

第2回:11月17日 岩城考信 (法政大学) 「バンコク・チャイナタウンにおける水辺空間の形成と変容」▽ロドリック・ウィルソン (スタンフォード大学) 「『江戸前』の形成と変容—19世紀における金杉と本芝の漁場・猟師町・雑魚場を中心に」 コメントーター:坪内良博 (甲南女子大学) ▼第3回:3月9日 中島岳志 (北海道大学) 「パウル判事と東京裁判」▽上田知亮 (京都大学) 「G・K・ゴーカーレーの地方自治論」 コメントーター:山本博之 (CIAS)

◆「比較の中の東南アジア」研究会

第11回例会:11月18日 古屋博子 (神田外国語大学) 「在米ベトナム人とベトナム共産党の政策転換」▽西村謙一 (大阪大学) 「地方自治への市民参加の制度化は可能か?—ケソン市開発評議会の事例を中心に」▼第12回例会:2月26日 宮城大蔵 (政策研究大学院大学) 「三つのアジア・アフリカ会議と日本—1955・1965・2005」▽鈴木陽一 (下関市立大学) 「ブルネイのマレーシア編入問題 1959-63」

◆「映像なんでも観る会」研究会

第5回:11月18日 「マーガレット・ミード巡回映画祭」 *Bride Kidnapping in Kyrgyzstan, Al Otro Lado, Children of the Decree, Nalini by Day, Nancy by Night, Phantom Limb* ▼第6回:12月25日 Tsotsi 監督: *Presley Chweneyagae* ▼第7回:2月17日 シンポジウム「映像に語らせる中東・イスラーム—中東映像人類学・ドキュメンタリー・ジャーナリズムの共同へ向けて」に向けて! 第一弾企画「パレスチナ—エドワー

ド・サイド再考」*D.I.* (2002年、仏・パレスチナ合作パレスチナ映画) 監督: エリア・スレイマン▽*OUT OF PLACE* 監督: 佐藤真▽講演: ナジブ・エルカシュ (ジャーナリスト、*OUT OF PLACE* 助監督) ▼第8回: 3月12日同シンポジウム第二弾企画「アラブ映画祭 2007 in Kyoto University」『恐怖の大地』監督: ダーウッド・アブドゥッサイード▽上映後: 監督の講演▽3月13日『バーブ・アジーズ』監督: ナーセル・ヘミール ▼第9回: 3月30日『昨日 今日 そして明日へ……』監督・撮影・編集: 直井里予

◆「地域研究アーカイブ」研究会

(基盤研究(S)「地域情報学の創出」主催) 第2回: 12月8日 北原淳 (龍谷大学) 「公文書解読とフィールド調査との間——タイ農村研究の経験から」 ▼第3回: 3月16日 桜井由躬雄 (東京大学) 「歴史地域学の試み——バックコックの13年」

◆「東南アジアの自然と農業」研究会

第128回例会: 12月15日 田崎郁子 (京都大学) 「北タイ・カレン村落における村人の移動の変化とそれに伴う生業形態の変容」 ▼第129回例会: 2月19日 米澤剛 (CSEAS) 「3次元地質モデリングの実用化と可能性——情報社会における地質情報」 ▼第130回例会: 4月20日 森下明子 (ASAFAS) 「ボルネオ島における木材伐採業者と政治家の癒着——インドネシア・中部カリマンタン州とマレーシア・サワラク州の事例」 ▼久世濃子 (京都大学) 「オランウータンの現状と新しい調査地の紹介——マレーシア・サバ州を中心に」

◆「東南アジア史研究の資料と方法」研究会

(龍谷大学アフラシア平和開発研究センターと共催)

1月13-14日 「東南アジア史研究の資料と方法——華僑華人研究をめぐる」『東南アジア研究』43巻4号「華僑華人史研究のフロンティア」合評 評者: 舩谷鋭 (立教大学)、濱下武志 (龍

谷大学)、村上衛 (横浜国立大学)、王柳蘭 (ASAFAS) ▽帆刈浩之 (川村学園女子大学) 「華僑社会における伝統的社会システム——中国社会史研究との関連から」 ▽守政毅 (立命館大学) 「アジアの華人ネットワークとビジネス——シンガポール中華総商会 (SCCCI) を中心に」 ▼3月31日 菅原由美 (天理大学) 「19世紀におけるジャワのイスラーム化過程の再検討——ペゴン写本と出版物を史料として」 ▽左右田直規 (東京外国語大学) 「植民地的知の現地化——イブラヒム・ハジ・ヤコブの汎マレー主義」 ▽片山須美子 (大阪外国語大学/立命館大学) 「ベトナム女性史の成立——ベトナム戦争・ナショナルヒストリー・ジェンダー」 ディスカッサント: 土佐桂子 (東京外国語大学)、小泉順子 (CSEAS)

◆「インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究」研究会

第3回: 2月23日 脇村孝平 (大阪市立大学) 「英領期カルカッタ市における公衆衛生問題の一断面——下水道・水道・尿尿処理」 ▽大石高志 (神戸市立外国語大学) 「インドのマッパ製造業における労働集約型経済発展——国際比較の中のシヴァカシの事例」 ▽西村雄志 (松山大学) 「第一次世界大戦前の英領インドにおける小額貨幣の役割——ルピー銀貨を中心に」

◆ API Seminar

March 9 Sing Suwannakij (Chulalongkorn University) “Paradoxes in Modern Japanese Spiritual Life” ▽Supa Yaimuang (Sustainable Agriculture Foundation, Thailand) “The Changing of Agrarian Livelihood and Sustainable Agriculture under Globalization”

◆「東南アジア大陸部における土地利用変化のメカニズム」研究会

第2回例会: 3月12日 古澤拓郎 (東京大学) 「土地利用変化を分析する上での課題——ソロモン諸島の熱帯雨林を事例に」 ▽越智士郎 (近畿大学)・柳澤

雅之 (CIAS) 「現地調査のツールと手法について」 ▽柳澤雅之・越智士郎 「ベトナム・西北地方の土地利用変化——直接的要因と長期変動の相乗効果」 ▽Vemuri Muthayya Chowdary (CSEAS) “Spatial and Temporal Land Use/Cover Changes in Northern Mountainous Region of Laos” ▽佐藤孝宏 (CSEAS) 「インド・タミルナドゥ州ため池灌漑システムの農業水利」 ▽梅崎昌裕 (東京大学) 「海南島リー族社会の土地利用分析」

◆ Kyoto Philippine Forum

“The May Elections and Peace Prospects in Moro Mindanao,” March 21.

Morning Session: “The May Elections in the Philippines: Prospects and Frustrations” Moderator: Patricio N. Abinales (CSEAS) ▽Ricardo Reyes (AKBAYAN) “The Left and the Legislative Process” ▽Nathan Quimpo (Tsukuba University) “Political Parties and Corruption”

Afternoon Session: “Mindanao Amidst War and Peace” Moderator: Ishii Masako (CIAS) ▽Jorge Tigno (University of the Philippines) “Migrants and the Mindanao War” ▽Rufa Guiam (Mindanao State University) “Gender Relationships during and after the War Years”

◆「農村開発における地域性」研究会

第17回例会: 3月30日 「アジアの農村開発の新しい可能性」安藤和雄 (CSEAS) 「趣旨説明——村で暮らす楽しみと誇りの大きさ」 ▽安野修 (CSEAS) 「災害支援における開発性と地域性——パキスタン地震被災者支援の事例」 ▽大西信弘 (京都学園大学) 「地域振興としてのエコミュージアム——インドアッサム州カジラン国立公園の可能性」 ▽矢嶋吉司 (CSEAS) 「村の文化資料館活動——暮らしとアイデンティティを学ぶ教室」

◆「近畿熱帯医学」研究会

第11回例会: 3月31日 濱田篤郎 (海外勤務健康管理センター) 「旅の進化とトラベルメディスンの発展」 ▽堀尾政博 (長崎大学) 「シャーガス病を媒介するカメムシ——サシガメ」

図書室ニュース

今回は、昨年度後半に到着した資料より何点かご紹介します。

【図書】

- ボルネオ関係近刊書籍 (約 80 冊)
Sarawak Chinese Cultural Association (砂拉越州華族文化協會) 出版物 34 冊を含め、サラワクを中心とするボルネオ島関連図書を収集しました。
- 仏領インドシナに関するフランス語古書 (約 40 冊)

1930 年代から 60 年代にかけて出版されたものがうち約 30 冊を占めますが、中には Truong Vinh Ky 著の *Cours D'Histoire Annamite, Saigon: Imprimerie du Gouvernement* (1875) や、A. Bouinai, A. Paulu 共著の *La France en Indo-Chine* (1887) など 19 世紀後半の出版物が含まれています。

【雑誌】

- *Aliran*

マレーシアのペナンで発行されている *Aliran* 誌を 1980 年 10 月の創刊号より購入しました。時代を追ってマレーシア知識人の言論活動の軌跡がみられるのではないのでしょうか。

【マイクロフィルム】

- カンボジアの新聞 *Réalités Cambodgiennes*. Jan 22, 1965-March 1975 を購入しました。

来訪者

ハサヌディン大学学長一行来訪

4 月 4 日、Idrus A. Paturusi ハサヌディン大学学長が京都大学を表敬訪問した。ハサヌディン大学は東インドネシア最大の国立大学であり、同大学教員には京都大学卒業生も多い。東南アジア研究所と大学院アジア・アフリカ地域研究研究科は同大学研究機構との間で部局間協定をすでに結んでおり、21 世紀 COE プロ

グラムに関連して、同研究機構内にフィールド・ステーションを設置してもらうなど、研究者や院生の調査にあたってさまざまな便宜を得てきた。

ハサヌディン大学学長ほか副学長、関連学部長等からなる一行 8 名は、将来の大学間交流協定の締結を含めた学術交流の可能性について、百周年時計台記念館迎賓室にて、横山俊夫国際交流推進機構長 (副学長)、田中耕司地域研究統合情報センター

長、平松幸三大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長、水野広祐東南アジア研究所長、ならびに Dorotea Agnes Rampisela 東南アジア研究所客員研究員 (ハサヌディン大学専任講師) らと意見交換を行った。

学長一行は、このあと場所を東南アジア研究所所長室に移して、地域研究 3 部局長と今後の共同研究・学術交流の具体的なあり方について意見を交換した。

2006 年 12 月 4 日 Mai Trong Nhuan (ハノイ国家大学副学長) ▽ Nguyen Dinh Duc (同大学科学技術研究科科長) ▼ 12 月 12 日 Hong Seok-Joon (木浦国立大学アジア文化研究所所長) ▽ Park Dongseong (ソウル国立大学社会科学研究所研究員) ▽ 2007 年 2 月 23 日 Oheo

Sinapoy (AMPI (ゴルカル系青年組織) 副幹事長) 他 6 名 ▼ 3 月 28 日 Surapon Nitikraipot (タマサート大学学長) 他 4 名 ▼ 4 月 4 日 dr, Idrus A. Paturusi (ハサヌディン大学学長) 他 7 名 ▼ 4 月 24 日 Sudjit Janenoppakanjana (スコタイ タマティラート大学講師) 他 1 名

2007 年 5 月 1 日発行

発行 〒 606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

Tel. 075-753-7344

Fax. 075-753-7356

<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 岡本正明・米沢真理子